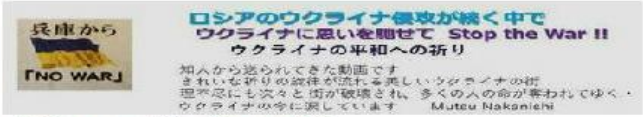
ひまわりの夏2024 先が見えない日本　この夏 気になった記事収集

「よう知らんけどな!!」がみえかくれの無責任 日本　2024.8.6.



終結してほしい戦争と憎しみの連鎖
「命は宝」―日も早く穏やかな日々を取り戻せますよう祈っていますに
https://www.youtube.com/watch?v=eqLcQJJt-Bk

困難の中に居られる方々にエールを!!

日々新た　今できることを　精一杯
無理せずゆっくりと
いつも　思いをはせています。
「忘れまい　忘れないで　仲間がいる
　暖かい希望の輪がつながっていることを」

神共に居まして
変えられるものを 変える「勇気」 .
変えられないものを
　受け容れる「心の静けさ」
両者を見分ける「叡智」を
　ニーバーの祈り　より .

コロナが済んで、さあ前向こうという時に、先導するマスコミまでもが、物言わぬ論調に。どれもこれも素人化であることの隠れ蓑。
眼に余る報道姿勢と素人化　日本先が一向にクリアーに見えぬのも無理なし。
「そんなことんいやろ・・・」と新聞に掲載されたその日の番組表に見る世相
　NHKニュースまでもが定時の安定性を忘れ、芸能化? 報道番組としての姿勢・役割のかけらもなしか?
もっとも　こっちも「よう知らんけどな・・・・」と付け加えるが。
　大阪人が会話の最後によく付け足す言葉。「よう知らんけどな!!」。
　政治家が使う三人称化の「**ねばならぬ。***言わざるを得ない」と同じ使い方の元祖かもしれぬ。
　最近のマスコミ・TV　そしい新聞報道までがそんな軽い調子になっていることを危惧しています。
激甚災害が頻発する時代にNHK定時ニュースまでもが芸能化をして、報道番組としての伝えるべき姿勢と役割を忘れているように見える。
アナウンサー・コメンテイタ?も含め、今一度　報道とは何か!! 報道の役目は何かを見つめ直す必要があろう。
今伝えねばならぬことをしっかりと伝える姿勢がほしい。
例えば、現場の映像とその映像を見ながらの感想コメントの繰り返し。今知りたいこととのギャップの大きさ。
そんなニュース番組に見られる姿が、通常番組ではもっとひどい芸能番組化。商業主義丸見えの粗雑な作り方、
なんでもかんでも若い芸人を使いたがる。何時から園芸館になってんやと。。
そして、「年寄りにはこの程度でええやろ」の丸投げ姿勢までも見える。流行と感知能力にたけた若者立が見逃すはずがない。
ラジオ放送がむしろ若者たちから年寄りまで、固定した人気番組を提供しているのとは大違い。
新聞の報道記事そしてコラムにもその影がひたひたと…。本当に署名記事も少なくなりましたね。

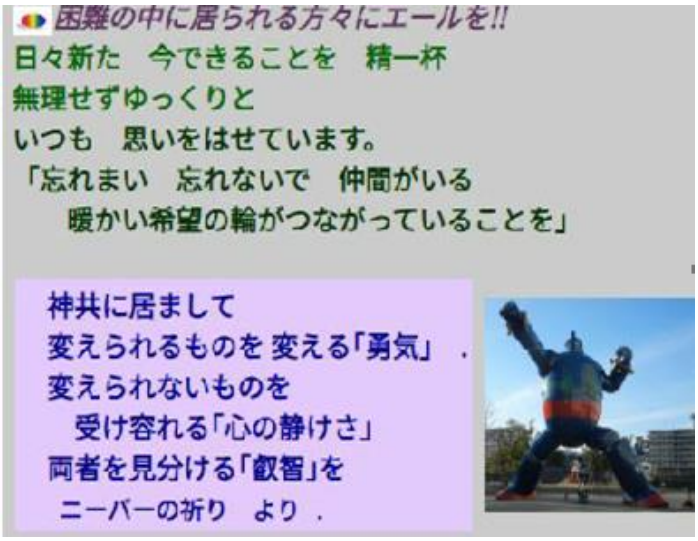
自民党政治の中で一番骨抜きになった情報を新聞・TVの報道が取り戻す主役となってほしいとの願い。
一方今もてはやされているインターネット通信のみに頼り切る危うさにもそのぼろが数多く見えだしている。
選挙にまで、平然とそんな影が見えだしたのもびっくり。
保守・革新から自民党一極の仲間政治から、浮動票と言われてきた中からも常識派が駆逐され始めている。
私の住む兵庫県でも県知事の行動にはいち早くおかしいと感じた人は多い。
納めどころがどうなるかで見えてくる日本の先行き。

このぼろが見えている間に対策・対応をしっかり社会で受けとめ、人一人が考える。
それこそが見える化側の受け止め。この厳しいネット社会の時代への警鐘が幾つもみえは締めている。
昔　今の日本の世界的位置付け・世界動向の変化は「大阪難波の地下街を歩く外国人の群れの変化を
自分飲めてじっくり観察すれば良く判る」と言ったことがあるが、それは今も。
また、いま新聞のTV番組欄を眺めてみれば、同じことが手に取るよう。
知りたいことが中抜きに。TVや新聞に頼る年寄りでも　はっと気が付く最近のTV。
観る者を考えぬ流しの番組の多さ。
ひまわりの夏。まあ　年寄りのたわごとです。
今日も世界的な熱波と干ばつ　世界は株価の大暴落　世界を巻き込む戦禍と核の脅威
そしてパリオリンピック等々　あらゆる情報が飛び交う今
これから　日本は　どう動いてゆくのか　行き先見えぬ日本
報道のあやうさがますます増加していると感じる今、視聴者・読者も踊らぬようご用心。
過多の情報にどっぷりつかり切り始めた若者たちへの黄信号
この時代を生き抜く知恵多き若者たちへ「明日は我が身」の警鐘でもある。

でも　ぶつぶつばかりは言うまい。うれしいことも一杯のひまわりの夏
◎ 躍動する若者たちの笑顔姿　日本各地の夏祭りや花火等々夏の風物詩の再興
◎ ８月１０日　原爆の日　指導者たちが声高で「核抑止力」を説く中で、
◎「核兵器即刻停止・命は宝」を呼びかける被爆者・広島市長や国連代表
そして多くの市民・子供たちそして　広島を訪れる世界の若者たち
平和への叫び・祈りに耳を傾けよう
真っ青な空に太陽に顔を向け、林立する大輪のひまわり
毎朝を清々しくしてくれる朝顔と樹木の緑の中から聞こえ来る蝉の声
熱波なれど駆け抜けてゆく夕立の清々しさ等々
嬉しいひまわりの夏2024の訪れ。

どうか　無理せず元気に
「熱コロナ」というそうですが、この熱波の中で　コロナ再流行
薬があると簡単に言うが、持病のある人や高齢者には厳しい夏
天候の急変・体調の変化の感度にも気配りを
God be with You!!　You Raise Me Up !!
2024.8.6.　ひまわりの夏に　Mutsu Nakanishi　From Kobe

◆ 安里有土君の詩　(2013.6.23.発表当時小学１年生)
「へいわって　すてきだね」
◆ Photo 広島原爆資料館 ＆ オバマさんの折り鶴
◆ スライド動画　広島平和公園・原爆資料館見学



ひまわりの夏2024　神戸季節の便り

ひまわりの夏2024
新聞&ネット収集資料

添付 資料　リスト　>>

【ひまわりの夏 2024】 最近の先が見えない日本　「よう知らんけどな!!」

ひまわりの夏　2024　今思うこと　2024.8.6.　Mutsu Nakanishi

添付 1.　最近の新聞記事やネット記事より　しっかりと受け止めた記事　神戸新聞の記事 *File*

- ■ 政治資金規正法快晴の議論と政治姿勢　2024.6.21.　神戸新聞　「正平調」より
- ■ 沖縄　慰霊の日に寄せて　首里城の赤　ベンガラのこと　2024.6.23.　神戸新聞　「正平調」より
- ■ 遠い昔と思う戦争がどんどん身近に「命は宝」　地には平和　2024.6.27.　神戸新聞　「正平調」より
  「ありえる」未来を「ありえぬ」に変えよう
- ■「汀にて　大概　(たいがい)という知恵」　鷲田清一　2024.7.31.　神戸新聞　文化面より

添付 2.　ニューヨークに来て感じた日本の圧倒的な「経済格差」と「理不尽さ」

元通産･経産官僚､政治経済評論家 **古賀茂明氏**　YAHOO! JAPAN　ニュース 7/16(火) 6:32 配信

新聞&ネット収集

添付Ⅰ.　最近の新聞記事やネット記事より　しっかりと受け止めた記事

記事に目をとめて、切り抜きすくらっぷした記事です

神戸新聞の記事 *File*　2024.6&7 月

政治資金規制法改正の論議と政治姿勢

神戸新聞 2024.6.21.（金）　神戸新聞朝刊　「正平調」より

正平調

漱石の「吾輩は猫である」に出てくる迷亭先生に、こんなセリフがあった。「蕎麦の延びたのと、人間の間が抜けたのは由来頼母しくないもんだよ」◆もう何カ月もの間、国会論戦を報じる記事で「ザル法」という言葉に繰り返し触れてきたからだろうか。党首討論の中継を見ながら、全く頼もしさが感じられない首相の姿に迷亭先生の言葉を重ねてしまった◆先に成立した改正政治資金規正法には、自民党裏金問題を告発した神戸学院大の上脇博之教授らが「相変わらず、裏金をつくり放題」と厳しい評価を下す。首相は「実効性のある制度。大きな一歩」と胸を張るけれど◆何に使ったか分からぬままの政策活動費も「政治活動の自由と国民の知る権利のバランスの中でつくった制度に基づき使う」と温存。それができなかったから問題になっているのに。やはり間が抜けている◆結局、首相が言いたかったのは「政治には金がかかる。そのための手段が必要」ということ。すると朝刊の川柳コーナーにこんな投稿が。「ザル法で金は身内の回りもの」。もう見透かされていますよ◆明治末、漱石は書いた。「現代日本の開化は皮相上滑りの開化」。開化を政治改革に置き換えれば令和の日本、いや昭和以来、ずっと上滑りしている。　2024・6・21

沖縄　慰霊の日によせて　ベンガラのこと

2024.6.23.　神戸新聞朝刊　コラム「正平調」より

正平調

きょう慰霊の日を迎える沖縄のシンボル、首里城といえば赤だ。大火に遭う前のあでやかなたたずまいが脳裏に浮かぶ◆多彩な赤系統の色にあって伝統色といえばベンガラ色となる。茶系が混じったような奥深い色合いで伝統文化を彩ってきた。実際、首里城にもベンガラが使われ、伊万里焼や九谷焼、輪島塗といった工芸品でも重要な役割を果たしてきた◆漢字で弁柄。インドのベンガル地方に産出したのが由来という。国内一の産地は備中吹屋、岡山県高梁市成羽町の集落だ。銅山の町として栄えた◆採掘時の副産物として出る硫化鉄鉱石を原料に赤色顔料を生み出す技術を江戸期に編み出した。最盛期のシェアは実に95%。最高級品は陶磁器の絵付けや漆器の材料、一般品は建築素材…。発色の美しさから「ジャパンレッド」として世界を席巻した◆文化庁の日本遺産に認定されたのは2020年度。個々の文化財を面でとらえ、ストーリーとしてまとめる点が斬新だった。認定は15年度に始まり、目標の100件を超えたことで吹屋を含む20年度分で終了した◆赤く染まる町を歩く。ベンガラ塗りの格子と赤褐色の石州瓦の家々が初夏の緑に映える。歴史的町並みの保全は現代の地域再生。発掘し、維持管理する努力は続けたい。　2024・6・23

遠い昔と思う戦争がどんどん身近に「命は宝」「地には平和を」「ありえる」未来を「ありえぬ」に変えよう

かつて職場でずっと頭に叩き込まれた「危険予知・安全の基本」それだけに すっと頭に

神戸新聞朝刊　2024.6.27.
「正平調」より

正平調

阪神間で育ったSF作家、小松左京さんが初めて書いた作品は「地には平和を」である。ストーリーはこうだ。日本がポツダム宣言を受け入れず、玉砕覚悟で本土決戦に突入していたら…◆15歳の少年たちが「本土防衛特別隊」として敗走を続ける悲劇を描いているのだが、小松さんは自伝に怒りを込めて記している。「私がSFとして書いた事柄が、沖縄の中学生、女学生の上には、実際に起こったのである」（「やぶれかぶれ青春記」）◆沖縄戦で編成された鉄血勤皇隊は14歳以上による日本軍初の少年兵部隊だった。ひめゆり学徒隊は看護役で動員された女学生である。突撃や集団自決で未来を奪われた◆先日の「沖縄慰霊の日」で地元の高校生が朗読した詩は、そんな若い魂にも届いたのではないか。〈七十九年の祈りでさえもまだ足りないというのなら／もっともっとこれからも／僕らが祈りを繋ぎ続けよう〉◆日本の若者には遠い昔話だろうと感じていた戦争が、どんどん身近になっている。879作品の中から選ばれたというこの詩も、不安の予感に満ちていて胸がざわつく◆終戦の年、小松さんは14歳。だから沖縄の惨劇は自分にもありえた未来だった。〈ありえた〉を〈ありえぬ〉に。今は亡き小松さんの願いである。　2024・6・27

神戸新聞2024.7.31朝刊文化面「 汀にて- <「大概」という知恵 > 」 鷲田清一

■文化部 TEL 078-362-7044 FAX 078-360-5512 ✉bunka@kobe-np.co.jp

〈「大概」という知恵〉

汀にて

鷲田清一

善意を信じ、探る均衡点

「大概」ということばがある。「大概家にいる」といえば「（例外はあるにしても）ふだんはほとんど家にいる」ということだし、「大概にしろ」といえば、「大概」はいわば許容範囲のことで、限度をわきまえろという意味になる。

これには一つ、強烈な思い出がある。大阪市天王寺区にあるお寺の住職さんの話。だいぶ前のことだが最寄りの地下鉄の駅構内から締め出されたホームレスの人たちを境内に受け容れているうち、青テントがみるみる増えて、ある日、起きて庭を見たら一面、波打つ海のよう。さすがにその日は庭に向かって「大概にしときや」と口走ってしまったというのだ、怒鳴るのでもなく、追い出すのでもなく。

よく似た話を御堂筋沿いの別のお寺でも聞いた。その寺では早朝に仏教講話の時間を設けているのだが、時間が時間なので朝食代わりにパンと飲み物を参加者のために用意している。食べるだけ食べて、講座に参加せずに去る人もいるが、食費にも困っておられるのだろうと、分け隔てなく食事を提供してきた。だが噂は広まるもので、やがて食べるだけの人が増え、講話を聴きに来た人に十分回らなくなった。そうこうするうち、さすがに気がひけたか、朝食目当てだった人たちからぼつぼつ講堂の最後列で話を聴く人が出てきたというのだ。

住職は最後に、「仏の教えにふれていただけるので、有り難いことです」と仰っていたが、この場合は押しかけたほうが言ってみれば「大概に」したのである。

自発性にまかせる

30年以上前にたまたまお寺でうかがった二つの出来事。とてもいい話なので、当時講演や会議の席で何度か紹介した記憶がある。

はじめの寺では「禁じる」というかたちではなく、判断を相手に「委ねる」というかたちで事の収拾が図られた。次の寺では押しかけたほうが「横着」にならないよう、つまり主催者の善意を裏切らぬよう、進んで慣わしに従った。いずれにおいても、「大概」にしておくこと、限度をわきまえることが、いわば当事者の自発性にまかせるというかたちで図られていた。要は、相手がいずれじぶん自身をふり返らざるをえないよう、もっていくことであった。

こういうかたちでの事の収束は、以前はどこでもあたりまえに見られた光景だった。が、近年、そうしたあたりまえが成立しない場面が極端に増えてきているようにおもう。

直近では、都知事選での同一政党からの異様な数の出馬であり、さらにポスター掲示板の他目的使用や他候補の演説妨害など、その「表現の自由」を口実とする行為は目に余るものがあった。交流サイト（SNS）や路上でのヘイト行為やカスタマーズハラスメントもエスカレートする一方だし、近年の高所得者層とそうでない層、さらには貧困層との格差も凄まじい。いずれも限度を超えたというか、行き着くところまで行ってしまいそうな感がある。

辛抱強く

子どもらの喧嘩がエスカレートしてくると、おとなが「はい、終わり」「ここまで」と割って入る。これも「大概にしときや」の一例。これ以上やるとヤバい、取り返しがつかなくなる。だから双方がそれぞれに思いとどまれるまあまあの均衡点を見つける、そうした調停である。頭から叱りつければ反撥もよけい昂じるので、細かいところまでいちいち言わないが、わきまえるべきところをわきまえるのがひいてはおのれのためになる、というわけだ。

「大概にしときや」と似た言い回しに、「ええかげんにしときや」がある。「適当なところでやめとき」と言う人もいそうだ。「適当」とか「良い加減」というのは、本来は、ものごとを原則や規範を前提に一義的に決めるのではなく、一定の許容範囲のなかで、みんなで状況に応じてあれこれ思案し、落としどころを探ってゆくことを意味している。言ってみれば、未決定のフリンジ（辺縁）を含み入れつつ、決定プロセスは当事者にゆだねる、そういう自生の解決法である。

その方法はしかし、対立する当事者間のものである以上、一筋縄ではいかないのがつねである。そのことは「適当」や「良い加減」という観念じたいが内蔵しているもので、だから同じ語でも状況しだいで反対の意味になってしまう。「適当」は本来、何かに相応しい、適っているという意味だが、「テキトー」とそれこそ信用の置けない、手抜きのいいかげんな行いをも意味する。おなじように「良い加減」も、一つ間違うと、おざなりやちゃらんぽらんといった「いいかげん」へと裏返りもする。

法律で一義的に取り締まるのではなく、かといって文化や個人の心構えの問題に還元するのでもなく、人びとがじぶんたちの間で辛抱強く落としどころを探るそうした知恵や工夫によって、傷口が広がるのを事前に防げるような場面が、この社会にはまだまだ数多くあるようにおもう。

◇次回は10月下旬に掲載予定です。

わしだ・きよかず　1949年京都市生まれ。京都大大学院博士課程修了。元大阪大学総長、前京都市立芸術大学長。せんだいメディアテーク館長。専門は臨床哲学。『モードの迷宮』（サントリー学芸賞）、『聴く』ことの力（桑原武夫学芸賞）など著書多数。

【From Kobe 2024年7月】

ひまわりの夏2024
新聞&ネット収集資料

インタヘネットでみつけた日本の現状を憂える一文の資料紹介

YAHOO! JAPAN ニュース　YAHOO! JAPAN　ニュース　7/16(火) 6:32 配信

ニューヨークに来て感じた圧倒的な「経済格差」と「理不尽さ」
日本人を“貧しく”した政府に国民はもっと怒るべきである

https://news.yahoo.co.jp/articles/2415375a28fef0a5a1de74fbb0c263d207081424

元通産・経産官僚、政治経済評論家 **古賀茂明氏**

古賀茂明氏

筆者は、少し早い夏休みで、6月からニューヨークに来ている。
大袈裟かもしれないが、今回の旅に出ることは、筆者にとっては、清水の舞台から飛び降りるような決断だった。
なぜかと言うと、とにかく全てが「高い」からである。
ニューヨークまでは、飛行時間が短い行きの便でも東京から12時間以上かかる。
エコノミークラスは体にこたえるので、ビジネスクラスを使うことにしたが、コロナ前には50万円しなかったJALやANAの便が、今では1人100万円前後かかる。
妻と2人で200万円。
少しマシなホテルに泊まると1泊5万円くらいはかかるので、Airbnbで探したら、キッチン付きでツーベッドの広い部屋が1泊1万5000円という安宿を見つけた。
マンハッタンからハドソン川を隔てたジャージーシティにある。少し不便だがやむを得ない。
それでも1カ月滞在すると50万円。
旅費・宿泊費だけで250万円の計算だ。
さらに、ここから先は皆さんご存じのとおり、飲食費がとにかく高い。
ラーメン3000円などというニュースに慣れていたので、驚きはしないが、日本で外食するのに比べて、感覚的には全てが約3倍という感じだ。歩いていて喉が渇いたと思って水を買うと300円から500円。
最初のうちは、頭の中ですぐに円換算してしまうので、何も買う気が起こらず、食欲も失せてしまう。
仕方なく、宿のキッチンでテイクアウトした惣菜に少し手を加えて夕食という日が続いた。
2018年、19年に来たときは、1ドル110円程度で、それでも高いと感じたが、今回のように絶望的な高さではなかった。わずか5年で1ドル160円にまで円の価値が落ちた日本の惨状を痛感させられる毎日である。
海外が高いと痛感しているのはもちろん私だけではない。

■ 米はタワマン住まいが「標準タイプ」

今年の夏は、日本からの海外旅行客はかなり増えるが、コロナ前の水準には届かない見通しだという。
しかも、欧米などへの旅行者はコロナ前に比べて大幅に減っている。
円安と実質賃金低下で、海外旅行、とりわけ欧米への旅行は夢の夢という人が増えているのだ。
ニューヨークのお隣ジャージーシティを歩いていると、昼間からジョギングをしている人が多い。
見ていると、彼らは30階から50階以上あるようなタワーマンションに吸い込まれて行く。
この10年くらいの間にタワマンが次々に建てられたようだ。
ちょうど、東京の豊洲や川崎市の武蔵小杉のようなものかもしれない。

筆者は、近くのタワマンに住む知人の部屋を訪れる機会があった。
3階分はあると思われるガラス張りの吹き抜けのあるタワマンのエントランスを入ると、コンシェルジュがいて、にこやかに挨拶をしてくれる。そこでは、宅配ロッカーに入らない大きな宅配便の荷物などを預かったり、よろ

ず相談係をしてくれたりする。　タワマンの８階には、とにかく巨大な共用スペースがあり、屋外にバーベキュースペース、プールやプレイグラウンドがあり、泳いだり、ガーデン用のソファに寝そべったりしている住民がいる。屋内には、設備の整ったスポーツジム、パーティーや大きな会議に使えるラウンジが三つほどあり、個室も含めたコワーキングスペース、プレイルーム、ビリヤードやゲーム台なども揃っている。
もちろん、住人は無料で使える。１階には幼稚園やカフェもある。

知人の部屋は、120 平方メートルで家賃は約 80 万円。リーズナブルだと言っていた。
小さな子供を車で５分ほどの幼稚園に預けているが、７時半から 18 時までの延長保育を頼むと月謝は 50 万円ほど。２人目の子供が生まれたので、４カ月目からまた幼稚園に入れるそうだ。
賃と幼稚園代だけで年間 2000 万円以上の固定費がかかる。さらにお手伝いさんも雇うというから大変な出費だ。
それでも生活できるのだから、「貧しい」日本人から見ると大したものである。

■損をしている日本の労働者

現地のテレビ放送によれば、最近は、こうした公共の施設を備えたタワマンが増えていて、徐々に「標準タイプ」になりつつあるという。知人のタワマンも標準ということなのか。大規模な図書館が設けられているところも増えているそうだ。
　中流の中でもやや上のクラスが住むところという感じだろうか。
その多くは夫婦ともにマンハッタンで働いている人が多いようだ。 テレビの言葉では、このようなマンションに住むことを「Affordable Luxuries」と表現していた。贅沢ではあるが、お手頃あるいは手が届かないものではないというニュアンスだ。
「高い」という話ばかりしたが、それにはもちろん理由がある。
それは、日本の労働者が、世界の中で見たときにいかに虐げられ、損をしているかを端的に示す話だからだ。
円安は単なる日米金利差のせいによるものではなく、構造的な日本経済の凋落を反映したものだという指摘が最近になってようやく広く理解されるようになってきた。
それを一番痛感できるのが海外旅行に出た日本人だ。留学したり、留学を諦めたりした人たちも同じだろう。
さらに最近は、インバウンドの外国人観光客が、数千円の串焼きの肉を「安い」と言って食べ歩く姿を見たり、外国人と日本人向けに二重価格制を取る店が出てきたりということで、国内にいても、日本人は「貧乏なんだ」と思い知らされることが普通になってきた。

一方で、政府・日銀は、これだけインフレが続いて市民が生活苦に陥ってもなお円安是正には動かない。
それどころか、政府日銀が、とにかく企業が値上げをすることが良いことだという雰囲気を作り、それに乗せられて、企業は一斉に値上げに動く。
今までと同じものなのに、なぜか値段が上がって当たり前だということになってきた。

■「好景気」のはずなのに悪くなる市民生活

企業業績が良くなったというが、輸出企業などが円安効果で直接的に潤っている他に、今では、「値上げ」で大幅増益という企業が続出している。もちろん、原材料高や人件費増分以上に値上げするから大増益になっているわけだ。 その結果、33 年ぶりの高い賃上げ率などと騒がれた春闘を経てもなお、実質賃金は 26 カ月連続マイナスで市民の購買力は低下を続ける。実質消費支出もマイナス基調が続き、市民が以前よりも少額しか消費できないことを示している。
史上最高の企業利益、33 年ぶりの賃金上昇率、バブル後最高値更新を続ける株価、
地方を含めた地価の大幅上昇という「好景気」の中で、どうして市民生活だけは悪くなるのか。
多くの人々は、肌感覚でそれを理不尽だと感じるようになってきた。
そして、その原因が、日本の経済の仕組みやそれを形成してきた政治の構造にあるのではないかと疑っている。
もちろん、それは自民党政権への批判につながっているのだが、この理不尽さを正してくれるのが立憲民主党なのかというと、これまた、否定的な人が多い。

自民の支持率がこれほど下がっているのに立憲の支持率はそれほど上がらない現象がずっと続いているのはその証である。
立憲は、前述の「理不尽さ」を正すための政策として、分配政策に重点を置くが、そのことが逆に分配の利益を享受する取り残された人々さえ不安に陥れる効果を持つことに気づいていない。
分配すれば経済が良くなると言われても、立憲や共産党のコアな支持者以外はほとんどこれを信じない。
そんな安易な政策を掲げることの方が胡散臭いと思っているのだ。
だから、裏金批判をして若者支援などの分配政策ばかりを強調した蓮舫前参議院議員は都知事選で大敗した。
旧民主党の幹部であった蓮舫氏を旧民主党転落の A 級戦犯である野田佳彦元首相を前面に出して戦ったのも驚くべき戦略ミスだ。

■沈没する日本経済を救うのは誰なのか

今年に入り、一般市民の多くが NISA を使って投資を始めた。株式などに投資する層は急増している。
そうした普通の人々は、立憲の議員が経済の最先端の話をする姿を見たことがない。
立憲のイメージの中に AI や先端半導体の話は全く入ってこない。
私は、立憲の議員とも自民の議員ともよく話をするが、残念ながら、自民議員と最先端半導体の世界の動向について議論することはあっても立憲議員がその話題について雄弁に語る姿を見たことがない。
一般人のイメージも私のそれと大差ないだろう。

政府の「貯蓄から投資へ」の掛け声は、
働いて裕福になるのは難しいから投資をして裕福になろうという国民への呼びかけだと人々は理解している。
老後に備えるためには、自分の力で投資して稼ぐしかないと考える層が急速に拡大しているのだ。
自民の議員たちは、彼ら彼女らに「立憲政権ができたら株が暴落する」と囁き続ける。
しかし、立憲の政策を見る限り、それを打ち消すようなメッセージはない。
結局、経済のためには自民しかないということになるのだ。

9 月には自民の総裁選と立憲の代表選が行われる。自民には、既得権層を守る政策を止めることはできない。
したがって、総裁選で誰が勝っても、日本の沈没を招いた政策の抜本的変革は期待できず、
日本復活につながることはないはずだ。
だからこそ、立憲にはチャンスがある。
立憲代表選では、政策論の前に、まず、野田佳彦元首相や、（本稿を執筆後に出馬の意向を表明した）枝野幸男元官房長官などの古き民主党の A 級戦犯たちが、引き続き偉そうな顔をして立候補することは絶対にあってはならない。そんなことになれば、誰も相手にしてくれなくなるのは必至だ。

■経済政策をわかりやすく熱く議論できる若手議員が必要

ではどうするのかと言えば、これまで名前を知られていないが、経済にも詳しく、旧民主党とは縁のないバリバリの実力のある若手が名乗りをあげ、経済復興策を熱く語るような論戦を展開すればよい。
できれば、明日からでも、そういう議員が SNS などで、新しい立憲の経済政策についてわかりやすく、
専門家を交えて議論する動画などを拡散してほしい。
日本復活との関係では、例えば、
1 ドル 160 円まで進んだ円安やそれを背景とした欧米への日本人旅行客の減少は
諸外国との比較の中での日本沈没のわかりやすい証拠である。
そこで、立憲が政権を取ったら、日本人が外国に行っても惨めな思いなどせず、
また、留学を諦める学生も大幅に減らすようにしますという目標を掲げたらどうか。

「欧米への旅行客の数」がコロナ前の水準を超えるところまで戻すというのも良い。

1ドル100円でも十分に儲けられる産業を育成するというのもわかりやすい目標だ。
そんな議論ができる若手議員がいるのか？
今は名前をあげないが、
少なくとも、野田氏や枝野氏や蓮舫氏より何倍もその能力が高い人がいるのを私は知っている。
日本に帰ったら、そういう議員に決起するようお願いしてみたい。

YAHOO! JAPAN　ニュース　7/16(火) 6:32 配信　　**最終更新:7/16(火) 12:56**

注　インターネット本文は改行空間等が多くあり、文脈に注意しながら、
文頭や空行など読みやすいように整理。　一部文をカラー改変整理しています

私のぶつぶつに　「また勝手なぶつぶつ　ひとりで言ってな」と言われますが、
先日インターネットを眺めていて、ニューヨーク旅行の見聞体験を細かく紹介しつつ、
日本の今の異常を解説する元官僚　古賀茂明氏の今の日本を憂える一文を見つけた。
私のぶつぶつと同じようなことが記されている。

私自身　古賀氏の一文すべてを丸呑みしているわけではないが、日本国力の現状
世界から取り残される日本の現状に一石を投じた一文。　勝手な私のぶつぶつより良く判ると。
老いゆく中で、次々と個々の課題として報じられる日本の現状にイライラする毎日
為替のトリック・や日本を外国との生活感の差を知る格好の一文と転記してご紹介。

今や欧米だけでなく、貧富の差はあれど　東南アジア・インド・アフリカ諸国を含めて、
日本だけが世界から孤立しているように見える。
輸出ばかりでなく世界からの輸入に頼らねばならぬ日本。今の状況が良いとは　とても思えない。

かつて、高度成長時代からその後のバブル崩壊　平成そして令和へ
日本と世界の関係変化については
「大阪 難波の地下を歩く海外観光客の姿・人数・国等々を観察すれば、日本と世界の関係が良く判る」と
ぶつぶつよく言っていたことがある。
円安がもたらす急激な物価高　そして　老化が進む中で先行きが見えぬ日本
まさに厳しい時代に先行きが見えぬ日本
ぼんやりではあるが、それぞれが世界と日本を考えねばならぬ時。
マスコミや新聞ではよく見えぬ具体的な生活感を考えてみる一助になればと。

2024.7.26.　Mutsu Nakanishi

ひまわりの夏2024 先が見えない日本　この夏気になった記事収集

収録1.　**ひまわりの夏2024　神戸季節の便り**　**2024.8.6. 収録**